

インタラクティブ空間演習 (女子美術大学大学院)

「イーミック」と「エティック」の視点

3章 「1. 記号と意味作用」 pp.78-88
(2014-09-17)

池上嘉彦 著「III. 創る意味と創られる意味—意味作用をめぐる—」、『記号論への招待』

担当： 石井 拓洋
ishii05042@venus.joshibi.jp

2014

【復習】「分節」と「差異」作用 p.76

記号表現
「子ども」

記号〔表現〕は、様々な対象、現象の中から、「同じ」意味、「同じ」価値をもっているものを選び出し、まとめあげる。
記号はこのように自らの視点に基づいて対象に区分を入れる (c.f. 76)

「異なっているのに同じである」 記号内容
c.f. 76

【復習】「分節」と「差異」作用 p.76

記号表現
「子ども」

記号の「分節」という働きは、「同じ」価値としての 等質性を強調すると共に、「異なる」価値としての 差異性を強調する (c.f. 77)

「分節」

「異なっているのに同じである」 記号内容
c.f. 76

「分節」と「差異」作用 p.76

記号表現
「子ども」

「分節」= articulation
n. 明瞭な発音 (すること) by "Genius G4"
→ ※ 解かりやすく分割すること

「異なっているのに同じである」 記号内容
c.f. 76

【復習】「分節」と「動機づけ」 p.77

記号表現
「子ども」

何が「同じ」で、何が「違う」か。対象界をいかに「分節」するか。
これを規定するのが「コード」 (c.f. 77)

「異なっているのに同じである」 記号内容
c.f. 76

「イーミック」と「エティック」 pp.78-80

「イーミック」 emic
「エティック」 etic 視点としての

- 文化間にみられる 〈ちがひ〉を考察するために有効な視点
- 本来は「言語学」の用語
- 米国の言語学者 K・L・バイク (Kenneth Lee Pike, 1912-2000) が提唱
- この用語は「文化人類学」分野でも応用的に取り入れられている

「イーミック」と「エティック」 pp.78-80

「イーミック」 emic な視点とは？

- 研究対象とする文化のメンバーとしての視点 (native viewpoint)
- 記号現象に対して「コード」にもとづいて文化を理解する視点
- 例) ある文化を見通す上で「病気は悪霊によって発病する」という当地の言い伝えを受け入れる 視点。
- 「エミック」ともいう

「イーミック」と「エティック」 pp.78-80

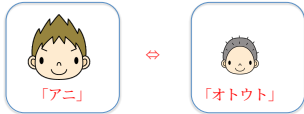
「エティック」 etic な視点とは？

- 「コード」にとらわれない科学者の普遍的 視点 (ちがうものはちがう)
- 記号現象に対して「コード」から離れて判断する分析的な視点
- 例) エティックな視点 = 「病気は悪霊ではなくて、病原菌によって発病する」という分析的な視点
- イーミックな視点 = 「病気は悪霊によって発病する」という文化内の言い伝えを受け入れる 視点。

「イーミック」と「エティック」 pp.78-80

〈兄弟〉の概念 ~日本語文化編

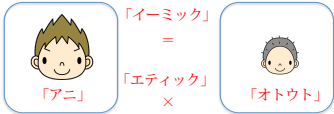
- 日本語では〈兄弟〉の概念は「コード」によって区別される。
- 「アニ」と「オトウト」として区別される。
- 両者を区別する日本のコードをふまえる「イーミックな視点」で〈兄弟〉の概念をみれば、両者は「異なる」



「イーミック」と「エティック」 pp.78-80

〈兄弟〉の概念 ~英語文化編

- 英語文化では〈兄弟〉の概念は「コード」によって区別されない。
- 英語のコードを尊重するならば「Brother」として「同じ」
- しかし、生物学的には両者は「異なる」
- 「イーミックな視点」で〈兄弟〉の概念をみれば、両者は「同一」
- 「エティックな視点」で〈兄弟〉の概念をみれば、両者は「異なる」



「不変項」と「可変項」 pp.81-83

本来の「イーミック」と「エティック」

- もともとは言語学分野の「音韻論」と、言語学以外の「音声学」に由来
- 両者は「言語音をどのように捉えるか」が異なる
- 【音韻論】の視点
言語音を機能の立場から意味の区別に因与するか否かで〈同異〉を判断。その基本単位としての音素を定める
- 【音声学】の視点
言語音を生理学的・音響学的に扱う。

「不変項」と「可変項」 pp.81-83

音韻論の視点 (イーミックな視点 = 「同じ」を看取する視点)

- 問題となる言語で「同じ言語音」としての価値の規定に関心をもつ
- 「銀河」 = 「が」は、「破裂音の /g/」でも「鼻音の /ŋ/」でも「銀河」の語として同一
- しかし、「が」を「ぎ」と発音すると、「銀河」ではなく「銀座」となる。
- したがって「銀河」の認識において、/g/と/ŋ/は同じ。/z/は異なる。
- 「銀河」を「ぎ」「ん」「が」とするよう、音韻論では言語音を分解する。分解した言語音を「音素」という。

「不変項」と「可変項」 pp.81-83

音声学の視点 (エティックな視点 = 厳密に科学的に判断する視点)

- 問題となる言語で「同じ言語音」としての**価値の規定**に関心はもたない。
- 言語音をひたすらに科学的・客観的に判断する。
- 例): 「銀河」が実際に発音される場合、厳密には同じ発音は2度とない。全て異なる。
- 音色、声の大きさ・高さ、発音の早さ、など発音は多様に化する。

「不変項」と「可変項」 pp.81-83

音韻論の視点 (イームックな視点 = 「同じ」を看取する視点)

- 音韻論の視点は、各国語の在り方(コード)をふまえて、語の発音の変動・変種の背後にある**恒常的なもの**・「不変的なもの」を読み取ろうとする視点(イームックな視点)。

※ 「恒常的なもの」・「不変的なもの」 = 「構造」

「記号表現」 pp.83-85

「記号表現」 (シニフィアン)に求められること

- 多様な意味の伝達を可能とするために「多数の記号」が必要

[But] 「多数の記号」では記号同士が類似するために明確な区別が困難

↑ (矛盾) ↓

- 明確で効率的な伝達のために、記号は「単純」で「少量」である必要がある

[But] 「単純」で「少量」な記号では多様な意味の伝達は困難

「二重分節」 pp.85-88

「二重分節」 ~ <単純で少量の要素>が<多数の記号>を生む仕組み

- <単純で少量の要素> = 単純で少量の「言語音」 (= 音素)

「世界中どの言語をとってみても、そこで用いられる言語音の数は、いくら多くても数十を超えることはない」(日本語は約50音)

- <多数の記号> = 「言語音」 (= 音素) の組み合わせによって多数の記号を作る

/ら/く/だ/ (3つの単純な音素で)

→ 「らくだ」, 「百済(くだら)」, 「墮落(だらく)」

※ アナグラム

「二重分節」 pp.85-88

「二重分節」 ~ <単純で少量の要素>が<多数の記号>を生む仕組み

(文章) 「赤い子馬は走る」

↓

(第一分節) 「赤い」「子馬」「は」「走る」

↓

(第二分節) /あ/か/い/, /こ/う/ま/, /は/, /は/し/る/

「二重分節」 pp.85-88

「二重分節」 ~ <単純で少量の要素>が<多数の記号>を生む仕組み

(文章) 「・・・ —— ・・・」 (「SOS」のモールス信号)

↓

(第一分節) 「・・・」「——」「・・・」 (「S」「O」「S」)

↓

(第二分節) /・/・/・/, /—/—/—/, /・/・/・/

「モールス符号(モールス信号) (一覧)」 <http://www.benricho.org/symbol/morse.html>

「二重分節」 pp.85-88

「二重分節」 ～ 〈単純で少量の要素〉が〈多数の記号〉を生む仕組み

- ・ 言語のような「記号」は、一般に、より小さな「記号素」に分節できる。

※ 視覚的記号などは、この限りではない。

以上